三島出身者の足跡と活躍2　「文芸三島」第59号より

沼津中学野球部々史抄録

中川和郎

昭和が遠くなった。まして大正明治は遥か彼方だ。

平成十六年（二〇〇四）七月、沼津東高野球部は、創部百周年の記念大会を盛大に催した。

明治三十四年（一九〇一）開設された沼津中学は、その三年後、明治三十七年（一九〇四）野球部を誕生させている。思えば日露戦争で国中が燃えていた頃だ。

沼中と前後して開校された韮中・浜中・掛中共々、明治二十五年（一八九二）頃、いち早く野球倶楽部を校内に結成した静岡中学を中心に、県立中学五校で、交流試合を試み、それが県内の野球創成期の一つの源流となっていく。

明治三十七年発行の「沼津中学学友会報」第一号には、野球部公選々手として、明治三十八年、第1回卒の渡辺慎一、秋鹿四郎、第2回卒の原川英一、斎藤盛一郎、関本文作、横山三郎、岩崎幸雄等の名が記されている。

そして更に野球の利点がつづられているのが興味をひく。

一　身体を強健にすること
二　動作を活発にすること
三　一致協力の精神を養うこと
四　一瞬の判断力を養うこと
五　臆病の気風を取りのぞいて　勇剛の気を養い質素の精神を養うこと

柔道や剣道などの従来の運動部の他に、一年前に創部した端艇部に続いて、新しいスポーツクラブはそうして誕生した。

第1回卒の芹沢進太によると、韮中から転校して来た二年生が、早々と野球を始め、強制的に倶楽部に入れられ、P・C・IBなどと訳の判らぬ地位の一つをやれと言う。芹沢はCFだったがなにしろ全てが初めてのことで、誰かに

代ってもらい試合には出なかった。しかしその倶楽部が二度勝ち、賞品のシャツがハイカラで欲しくなり、売ってもらって着たという。（註「地位」ポジション）

その頃は用具も乏しく、ほとんどがシャツに半ズボンか柔道着のズボン、脚はん、ハダシか足袋。ボールは素手で取り、転校生の一部がグラブ、ミットを持っているだけで満足出来るものではなかった。

選手自身も他の運動部と掛持ちで、ルールも詳しくは知らず、かなり曖昧だったらしい。各中学ともコーチや監督も正式にはおらず、夫々の先輩たちなどから野球知識を教わった。

それでも沼中最初の対外試合は、明治三十七年一月、静商と行い23－15で勝っている。同年八月、掛中を破り、翌年から二年続けて韮中に勝つ。遠足の途中立ち寄った鎌倉師範に大勝するも、静中に破れ、明治四十〇年からは韮中に連敗するような、まあまあの目立たないチームだった。

やがて明治末期から大正初期の県東部には、沼中韮中だけでなく田方農林、沼商の倶楽部チーム、駿河銀行、駿豆鉄道、富士水電（現東電）、駿東病院、桃中軒などのチームが結成され、更に地域や同業者らのチームが誕生した。

明治座支配人で療養のため沼津へ転居した川上五郎が、オーナーで集めたチームなど、バッターボックスに立った男が、四、五球で見逃し三振するや、「何がアウトだ。オレはまだ一ペンも打ってねえぞ」と怒ったり、左ボックスの選手が、「何故アウトだ。オレはこゝに立っとって、打って真直ぐ走ったじゃないか」と息巻いたりした。打って三塁へ走ったのだ。

オーナーの川上も最初の頃はよく分からず、ベンチに黙って座っていたという。そんな時代だったのだ。

明治初年、米国の神父が横浜にもたらした「ベースボール」は、東大の前身開成校を中心に、明治十年頃まず学生間に広がり、一高野球部の隆盛などと共に、「野球」と呼称、その後、明治三十年前後から、またたく間に全国的に流行していった。

更に明治三十五年（一九〇二）、慶応の名取和作が、三田網町に野球場を建設、翌年、早稲田が戸塚に新球場を設立し、明治三十六年十一月、早慶両者の決戦が開始されるや、野球熱は各地に波及、大きな話題となっていく。

明治四十〇年代に入ると、沼中も一応ユニホームを着用

したり、初期スタイルを脱するが、遠征して来た明治大学に25－0と大敗。部員の大半は寄宿生で、野球人気に支えられて結構校内でハバをきかせていたらしいが、弱小チームで選手も集まらず、対外的には一向にふるわなかった。

明治二十六年（一八九三）、島郷に御用邸が設立され、同四十四年、皇太子（大正天皇）が沼中に行啓。学習院も静浦に寮を建てる。大正三年の夏、その寮に来ていた同校から野球試合を申しこまれる。

学習院といえば東京のお坊ちゃん学校だ。たいしたことはあるまいと、軽い気持ちで受けて立った。

当日、賀陽宮・山階宮・久迩宮三皇族が臨場、その雰囲気に呑まれたか、加えて学習院の選手たちのプレイも垢抜けていて散々な目にあった。当時学芸部々長橋爪健（中11回卒、校歌作詞者）の観戦記を見てみよう。

「三回の裏、四回の表と進み行く中あわれや岳南健児の鉄腕も東都の覇者には敵し難かりしにや射すくれられ切り伏せられ（中略）我攻むれば彼守り彼進めば我退き而かも東都の覇者は遂に我首を陣頭に掀（かか）げ十三対二のスコアゲームにて今日のマッチは無事終りを告げ（中略）三宮殿下には我記念館図書室にて御夕食を喫せられ御満足の御言葉を給わり静かに御帰邸相成候ひき」

しかし実際のスコアは14－2。その時部員の一人だった渡辺邦男（中13回卒、映画監督）によると13－0。何れにせよこの思わぬ惨敗に、部員一同大ショック。これではいかんと名門横浜商業にコーチを依頼、懸命に練習に励んだ。

時の顧問は幾何の教師。カラ振りばかりする部員に「バットを水平に振るより、斜めに振れば球が当る面積が広くなる」という理論を押しつけ、選手たちは大根切りの打撃フォームをくり返していた。これには横浜商業のコーチも、唖然としたという。

全国的に「野球害毒論」や、「野球亡国論」が吹き荒れ始め、不良少年たちがやるものだ言われ、親にかくれて白球を追った時代だ。学校当局も学業優先、野球部員は特にマークされ、成績不良だと退部させたり、落第もさせた。

渡辺にまつわるエピソードだが、英語の試験の際、級友の秀才からヤマを教わり、それがマンマと当り勢い込んで答案を書いた。しかし出題されていない分まで長々と記し教師から「このクラスには天才的な生徒がいる」とからか

われた。しかし合格点はくれたという。級友は後、東大を出て高級官僚になった男だが、渡辺が退部、落第でもしたら野球部が困るだろうと案じての助け船だった。

渡辺は小柄だったが、無茶で無謀、皆が嫌がるキャッチャーを買って出る。胸当もすね当もないのに、痛みに耐えて我慢し続けた。しかし興奮すると涙が出るし、二塁まで球は届かず、三塁と交代したり、主将を務めた頃は外野手になっていた。

渡辺主将を中心に、野球部強化に努め始めた矢先、大正五年九月、寄宿舎から出火、やっと集めた野球用具も焼失する。

この同期、大正六年（中13回）卒の部員には興味をひかれる。一高、東大と進み、後、沼津で開業した医師槇正男、自らドロップなどの球種を工夫身につけた、陸士陸大と歩んだ剣道部長も兼ねた投手清水馨。韮中から転校して来て、ショートだった渡辺孝。彼は渡辺邦男とは縁続き。新しもの好きで当時では珍しいカメラにこっていた。明大を出て日活へカメラマンとして入社。後年、二人は映画界で監督、撮影のコンビを組み幾つかの話題作を手掛け、昭和三十二年（一九五七）「明治天皇と日露大戦争」で空前の興業収益をあげる大ヒットをとばす。早稲田を出て失業中の渡辺邦男を、日活に結びつけたのはチームメイトの渡辺孝だった。

お二人のことを思い描く時、運命的としか言いようがない不思議さを覚える。

大正六年秋、大相撲出羽海部屋が巡業で沼津へ来た。野球チームがあって、その監督が美男新進力士「福柳」だった。試合を申しこまれ校長の許可を得て対戦。巡業先で何度かやっていたようで強かった。6－1で完敗。

大正七年（一九一八）八月、朝日新聞社主催第一回静岡県中等学校野球大会が、正式に挙行される。参加校は、静中、浜中、韮中、掛中、沼中の五校。結果は浜中の優勝で終った。

沼中は大正九年（中16回）卒の人たちが中心。

トップでショートの河合三郎は、三嶋暦で有名な河合家の子息。修善寺の大地家に入り、県会議員、町長を歴任した大地三郎。コーチに来た大学生に教わったバンドを、韮中戦で成功させた時、韮中応援団から卑怯者呼ばりされたという。それほどバンドが珍しかったのだ。

投手だった根上耕一。沼中野球部の歴史の中で、この人の存在は忘れがたい。御殿場の出身で、父親の仕事の関係から大阪には度々行った。大正四年、豊中球場で始まった全国中等学校優勝大会を、毎年続けて観た。野球に魅せられ沼中に入学すると直ぐに野球部に入る。スパイクやユニホームをいち早く購入。火事で用具その他をなくし、沈滞気味の野球部の充実に努めた。

スパイクは彼の物をサンプルに、鍛冶屋、靴屋に頼んで部員各自が身銭を切って造った。その頃注文靴が二円五十銭、スパイクは三円もした。明治四十二年頃の沼中ナインの写真を見ると、一応ユニホームを着ているが、火事騒ぎの後はあり合せですませていたらしい。根上たちが新しいユニホーム姿でグランドに出ると、「そんな印半てんみたいな物を着るのはよせ」と言われたし、スパイクも「グランドに穴があく、畑のように荒すな」と注意された。

根上は用具のことと同様、発刊された「野球界」を真っ先に購入。その主筆と文通を重ね、ルールについて詳しく覚えた。やがて高学年になるにつれ、野球ルールに関しては、沼中に根上ありで、生きたルールブックとさえ言われたという。当時の野球部部費が百円、ボール代が精一杯だったろう。思うに根上が自腹を切った金額は相当なものだったにちがいない。

卒業後、横浜高工（現横浜国大）を経て、コロンビヤ大学へ。在米中、ヤンキースタジアムに行き、その全てに圧倒され唯々驚嘆した。スケールの格段の相違を痛感せざるをえなかった。戦後、椅子のメーカー「ネコス」を創設して名高い。

根上の一級上で捕手やセンターで四番打者の野村久秀。親に内緒で野球に没頭、スパイク代も親をだまして捻出した。立教大学に進みバスケット部に。大正十一年の極東オリンピックの代表選手だ。一塁は一高東大と兄正男の後を追い医師になった槇次郎。他に東北大学を出て外務省に入り、コロンビア、フィリッピン、ギリシャ大使などを歴任した梶（土屋）隼は三塁を守り、負傷退場。左翼池上弥一郎は万能選手で、第一回静岡県体育大会で走高跳で二位。後、捕手で鳴らし、法政大学に進学、中途で日本大学に移り、日大野球部創立時に活躍した。

そうした彼ら（中15・16回卒）の後輩に、一高東大を出て東京高裁部長、司法研修所長をつとめた弁護士鈴木忠一がいる。大正十三年（中20回）卒。伊東出身で下宿してい

た大叔父島田三郎弁護士や親にも黙って野球部に入る。

大正十年、静岡に遠征し、静中に13－8で勝った時の一塁手。バレないように、勝利に酔うナインに別れ、一足先に沼津へ帰った。夜更け意気高らかに校歌を唱う仲間たちの声を、独り下宿でじっと聴き入っていた。もっともこの時の静中は二軍メンバーだったという。

同じく大正十年（一九二一）十月、岡野豪夫会長（中3回卒）、川上五郎副会長等で、沼津野球協会が発足する。その記念大会には沼中・韮中に、実業団チームが加わり十チームが参加。沼中は駿豆鉄道と対戦、乱打戦の末日没ドロンゲーム。翌日再試合では4－20で敗退。この沼津大会は以後、沼津野球協会主催で「東部大会」としてかなり続いた。

大正十一年、東海五県連合野球大会に出場。名古屋の熱田中学などの会場で、初戦浜中と対戦、9－3で圧勝したが翌日静中に2－9のコールドゲームで完敗。

尚、この時期、沼中在学九年に及んだという豪傑金指玉司がいた。九十キロの巨漢で柔道が強く、野球では一塁手として活躍し、後拓殖大学に進み柔道部主将をつとめた。

大正十二年四月、沼津商業に正式に野球部が発足する。沼商の開校は沼中より古いが、野球部の創部はおそかった。大正十年頃、校内の野球好きが集まって、「スパルタ」というチームを結成。それが富士水電（現東電）の慶応OB日疋（星日疋）道夫の指導尽力によって、沼商野球部として生れ代ったのだ。

そこで沼津野球協会は、折角二校のチームが揃ったことだし、定期的な対校戦を実施したらどうかと、その世話人会を立ち上げる。

岡野豪夫（駿河銀行）、川上五郎（明治座支配人）、大古田久（中12回卒・沼商野球部長）、山家正（軍事教官）、長沢勝己（駿河銀行）、上島恒雄（東京水電）。

同年七月、沼津町から沼津市に。九月関東大震災発生。

十月、震災義捐金募集野球大会と銘打って、早速沼商との対校戦が、入場料三十銭で沼中の校庭で行われた。結果は11－10で沼中が勝っている。

十二月も押し迫った二十七日、御用邸にご滞在中だった澄宮殿下（三笠宮）の御養育係からの連絡で、台覧試合が

あわただしく催された。午後一時殿下行啓、選手一同拝謁し御菓子料を賜り、試合開始。澄宮クラブ対沼中戦と言われているが、諸説あって詳細は不明。しかし試合途中、宮中から電話で摂政宮裕仁親王（昭和天皇）への難波大助の狙撃事件突発の報が入った。例の「虎の門事件」である。

だが殿下は自らスコアブックをつけながら、12－12の長時間にわたる引分け試合を最後まで観戦された。しかし、さすがに翌日に予定されていた試合などは中止された。

沼商野球部の発足と共に、しばしば行われた沼中との対校戦について、川上五郎は次のように回想している。

「初めは沼商の生徒なんかも自費で選手に出ていた。中学の後から野球部が出来た訳だ。そして見ていると、中学の方がかわいそうだ。商業の方は皆沼津の人、応援もワンサといる。中学は寄宿舎にいる連中が主だから応援も少ない。ぼくは大いに憤慨して『布沢』で紫の布地の応援旗を三百本位作った。試合があると出張って中学の応援さ。

そしてどうにか中学を強くしようと、一個二銭の豆大福を一円づつ買って、こいつが喰いたければ練習しろと言った。学生は大福にありつけると言うんで、一生懸命練習する。毎日買って行ったので部員もふえ強くなった。

それから早慶戦になぞらえて、ぼくがカップと旗をこさえて取りっこさせたですよ。それからが大変だ。両方とも熱中してね」

大正十三年五月、両校による川上杯争奪戦は行われ、一回戦14－8、二回戦6－5で沼中が勝っている。その後、長倉運動具店、カジマヤ運動具店なども、優勝旗などを出している。因みに現在の校歌と紫の校旗は、大正九年創立二十〇周年記念に設定されたものだ。

大正十五年（一九二六）夏、静岡中学が全国大会で優勝。県下の野球熱は、益々昂揚していった。

そして昭和に移っていく。

昭和二年（一九二七）四月、沼中沼商両校は世話人会の肝いりで始めた対校戦を、正式に毎年春秋二期実施すべく協定する。沼中村山校長、高田嘉応野球部長（中5回卒）、沼商小谷校長、大古田久野球部長四人の度重なる協議の結果だ。

これが非常な人気を呼んで街を二分した沼津早慶戦の始

まりである。

当初審判を沼中側池田、沼商側上島両氏に依頼。

同年六月二十四日、一回戦を沼商で行い、8－8の引分け。六月二十六日、18－19で沼商、二八日、10－8で沼中と、記念すべき第一回定期戦は引分けに終った。

こうしてその後熱っぽい接戦を毎回くり返し、街をあげての年中行事に盛り上っていく。沼中は慶応カラー、沼商が早稲田スタイル。どうやらそれは、当時ツテを求めて依頼したコーチや指導者によって、自ずとそうなっていったようだ。

人気が高まるにつれ、観客は昂奮し試合終了後、審判の自宅へ押しかけ乱暴を働いたり、ファン同士のいざこざが絶えず当事者の気苦労は大変だった。

大正九年、沼津へ移住、後、「カジマヤ運動具店」を開店し、市会議員などをつとめた鹿島幸次郎は、両校と無関係だったため一時、定期戦の審判を任された。「カジマヤ運動具店」もまた、試合の翌朝しばしば店のガラスが割られていた。

沼中はどちらかと言えばインテリ層、沼商は商業、水産業関係者、下町風で威勢がいゝ。試合の度によくもめた。試合は土日曜に両校の校庭で行われ、三回戦で二勝した方が優勝、春秋二回催された。全校生徒の応援に一般ファンも加わり大変な騒ぎ。試合中にも審判の判定をめぐって観客が騒ぎ、その度に二・三十分の中断は珍しくなかった。

勝った方の生徒は隊列を組んで、校歌、応援歌などを放吟しつつ街中を練り歩く。生徒たちの間でもよく喧嘩になった。

東京での早慶戦がその応援団同士の騒動で、中断せざるをえなかったように、沼津の早慶戦も両校の応援者を教育するなどの努力が必要だった。審判も池田、上島両氏を復活させ、その後市内はもちろん、近辺の野球振興に寄与する一大イベントとして定着していった。

しかし昭和九年、春秋一回ずつの定期戦にかわる。この沼津早慶戦は、静中、静商の静岡早慶戦に先んずること一年前で、静岡県下最初の田舎早慶戦であったことは誇ってい、。

昭和三・四年の卒業生（中24・25回）には、忘れられない人たちがいる。芹沢光治良（大正四年卒・中11回）の実弟、小山（芹沢）武夫（中24回）は、野球と陸上競技をやりながら、野球部でチームワークとルールに忠実であれというスポーツにとって、最も大事な基本を身につけた。法政大学を出て社会人となり、それを生かすことが出来、後、中日ドラゴンス社長として、多少なりともプロ野球界に寄与出来たのも、沼中時代に身についたそれらのお蔭だと語っている。

沼中時代中途で退部したが、東京商大（一橋大）に進み、野球部で活躍した安田生命保険会社々長水野衛夫（中24回）その一年下の、私たちに最もなじみ深い金井林作。

私がまだ小学生だった頃、三島駅の東裏にあった田方商業（三島南校に統合）の、溶岩むき出しの狭いグランドで大声をあげながら、ノックバットを振っていた姿を思い出す。小学生時代からスポーツ万能、沼中に進み、テニス、陸上、野球となんでもやった。野球は投手や外野手、三番打者として活躍した。敗戦後、いち早く沼津市野球連盟を設立、会長兼審判長として尽力し、県野球連盟の創立にも参画した。

沼中時代、彼とバッテリーを組んでいた金井武和は、海軍経理学校を出ながら、航空隊に志願、中国大陸への第一回渡洋爆撃隊長として名をあげ、終戦時、日本進駐に向うアメリカ艦隊に突入自爆して果てたという。

又、昭和六年（一九三一・中27回）卒の秋山武夫は、投手だったが打者としても優れ、将来を属望されながら大陸へ渡り戦死している。

昭和八年（一九三三）三月、第一回県下中等学校春季野球大会が開催され、三年前に建設された草薙球場で、沼中は浜中と決勝戦を行い3－2で優勝する。初めて県下一位となる。但し強豪静中、島商が共に全国選抜大会に出場中で、鬼の居ぬ間のなんとやら、余り喜べない優勝であった。この時の投手横山達也、捕手西山（土屋）円次郎（昭和九年・中30回卒）は、県下でも屈指のバッテリー。特に横山は打者としても有名だった。彼も又、戦火に没した。

昭和十一年（一九三六）六月、沼中は校舎改築と新球場を落成。その祝賀野球大会を静中を招待して挙行した。

その時、土浦海軍航空隊に所属していた直井一雄（中28回）は、写真師を同伴し飛行機で母校を訪問、始球式に〈処女ボール〉を投下する予定だった。しかし試合開始に間に合わず、試合途中に機上から投下、上空を二三回低空旋回し、五色のテープを投げ香貫山の向うへ飛び去って

行った。しかし間もなく故障のため中郷村（三島市南部）に不時着、機体は大破、直井たちも軽傷を負った。連絡を受けた学校は同窓会の高田嘉応幹事長を見舞のため現地へ送った。それにしてもその飛行機が軍用機なのか民間機なのか定かではない。

そんな中で、一年生投手中山敏朗（昭和十五年中36回卒）は多くの四死球を出しながらも、二安打に押え7×－3で快勝。島商などに抑され衰退気味だったとはいえ、名門静中を打破し、職員はじめ学生応援団、押しかけた観集は狂喜乱舞した。

この年、沼商との定期戦は最後となり、勝った沼中は優勝旗を持ち帰る。それを高田嘉応部長は終戦後まで自宅の倉庫に保管してくれていた。

昭和十二年（一九三七）「沼中月報」創刊。七月・日中事変勃発。以後、戦争の暗雲は次第に重く広がって行き、多くの球児たちも戦場に狩り出される。そして大陸や南方の彼方で、その短い生涯を閉じている。

同窓会名簿をひもとくまでもなく、沼中卒業生の戦没者二八二名の中には、戦争がなかったら六大学や実業団、あるいはプロ野球界において、十分通用したであろう選手たちが幾人かいる。その他の人たちも、あの香陵のグランドで、ボールを投げバットを振って、校内野球大会などで楽しみ、爽やかな汗を流した日々があったにちがいない。そんな事どもを想い返すと、そのご冥福を祈り、唯々合掌するのみである。

大昭和製紙が実業団チームを誕生させたのは、昭和二十一・二年の頃。その創部育成に尽力したのが、昭和十一・二年卒（中32・33回）の久保田喜延・石井貞二たち。むろん後の社長斉藤了英（昭和九年卒中30回）の力強い援護があったからだ。

島田商業との試合で、バッタバッタと三振をくらい、ファンからバットを振らず、初めからバンドのようにバットを「だゃあとけ！だゃあとけ！」と、野次られた話など久保田から直接耳にしたものだ。昭和二十七年（一九五二）大昭和監督翌年全国大会で優勝する。

石井貞二は大昭和のマネージャーとして敏腕をふるい、後、野球部長に就任、久保田とともに全国大会優勝三回の栄誉に輝く。

昭和十四年（一九三九）（中35回卒）の池田裕、尾崎明。池田は開業医として多忙をきわめながら、オール三島をひきいて活躍。戦後の学区制への抗議を頑固に続け、三島香陵会々長を長期にわたってつとめた。

尾崎明は、三島東小学校時代、私の兄中川力とバッテリーを組み、県下大会で優勝している。

三島は、韮中・早稲田と進み、町議員・町長・市長を歴任した朝日原作が、大変な野球好きで町長時代から少年野球を奨励し、その育成強化に力を尽した。役所内にもチームを結成。昭和九年、アメリカチームの草薙球場でのあの沢村の快投を生んだ試合を職員ともども見物し、物議をかもしたこともあった。

三島役場のあの庭からは、以後、数多くの野球少年が輩出する。

戦局は次第に拡大急をつげ、昭和十六年十二月八日、太平洋戦争が勃発する。この年第二十七回全国中等学校野球大会は、各地で予選が展開されながら、時局重大ということで中止となる。当時沼中はかなり充実していて準決勝まで進むが、富士商に惨敗。その時点で大会は打ち切り。

代って同年十一月、愛知、岐阜、静岡の軍三師団連合選抜戦が催され、沼中は3－2で静中に勝っている。その直後、戦争が始まったのだ。敵国のスポーツ野球は白眼視され、各校の野球部も解散、廃部に追いこまれていく。

昭和十七年（一九四二）六月、沼商との最後の定期戦を応援団抜きで行い、十月沼工と試合し沼中野球部も解散する。昭和十八年、一切の対外試合は禁止され、二十年八月の敗戦までの間、ボールに代って手榴弾の遠投が、教練の時間強制的に実施された。

昭和二十年（一九四五）八月十五日、永い戦争は惨めな敗戦で終った。

平和と自由と民主々義―柔剣道は禁止され、野球は復活した。沼中野球部は昭和二十一年二月、まず軟式野球部で発足し、初戦は沼工戦で0－3で敗退。部としての用具は揃わず、各自が持ちより野球好きが顔を揃えた。

食糧事情も悪く、練習する場所もなかった。香貫の校舎は空襲で焼失、軍隊に接収されていた運動場は防空壕などがそのまゝだった。

そんな中で敗戦の年の暮、駅北の焼け残った海軍工廠の事務所を仮校舎として沼中は復興する。周囲には数多くの防空壕や、南瓜や芋畑の跡、平地はほとんど見当らなかった。野球部は、わずかに残った沼津農業校（現沼津城北校）の、荒れた運動場の一部を借りて、ボツボツと復員して来たOBたちの援助で練習に励んだ。そして昭和二十一年夏、再開された県大会に臨んだ。

〔昭和21年度沼中メンバー〕

（三）時川　清　　（補）鷲巣英治
（遊）中山　寛　　（〃）渡辺　功
（二）杉本喜雄　　（〃）長倉喜四郎
（左）杉山通三　　（〃）池田　清
（捕）平出善一　　（〃）長田忠昭
（中）野沢幸男
（投）村田　弘　　監督中山敏朗
（右）露木義孝
（一）大岳秀行

第二十八回全国中等学校野球大会県大会は、十九校が出場予定だったが、一校が辞退、実際には十八校で開始された。全国での参加校は七四五校。

まだ整備しきれなかった草薙球場での連戦に、前記したナインは、沼商、富士中、晁陽工、掛中を撃破、県大会に優勝。山静大会でも都留中を破り、再度掛中と対戦。7－3で勝ち山静代表として、全国大会へと駒を進めた。

正式な応援団もなく、野球好きな連中が試合ごとに満員の列車に乗りこみ草薙に応援に行った。時には無蓋貨車のこともあった。運良く買えた冷凍ミカンの味を思い出す。

優勝旗を囲んで球場を出ると、近くにトラックが停っていた。汽車で沼津まで帰るのは大変だからと、言われるままにゴザを敷きつめたトラックに乗った。誇らかな凱旋。着いたのは駅前の桃中軒。そこでライスカレーをよばれ、嬉しさが込みあげてきた。トラックは大昭和が出してくれ思えばそれが祝勝会だった。

何しろ沼津中学にとって、その野球部にとって初めての快挙であった。甲子園は進駐軍に接収されていて、第二十八回全国大会の会場は西宮球場であった。

初の西宮行は大変だった。まず自分たちの食糧、米、小麦粉、南瓜等野菜その他、用具衣類と一緒にリュックサックなどにつめた。やっとの思いで西宮へ。宿舎は球場近くの割烹旅館「富松」。当時再開されたばかりのプロ野球阪神タイガースの外野手富松選手の実家。代表校は全部で十九校。その中十五校が、焼け残った西宮市の関西学院寮に宿泊、成田中は成田別院。どう手配したのか沼中は「富松」だが、発行された選手名鑑の宿舎は「松風荘」となっている。

練習用に借りたのがプロ野球のスター別当選手の母校、東陽中学のグランド。大会初日、八月十五日の第二試合に優勝候補の一つにあげられていた愛知商業との対戦が決った。

物資乏しい時代、ユニホームはどうにか揃えたが、マークはN※一字。それも急いで部員の洋服屋で縫いつけてもらった。ストッキングは同色のものが入手出来ず、内野と外野は色違い。スパイクも各自が都合した。

試合前にせめて球場の様子だけでも見ておこうと皆で行くと、プロ野球の近畿グレートリンクと阪急ブレーブスの試合の最中。スタンドでしばらく眺めて旅館へ戻った。

十五日午前八時半から十九校主将による大会旗掲揚、京都二中田丸主将の宣誓と開会式も終了。京都二中が1－0で成田中を破った後、いよいよ出番となった。

愛知商木村投手のアウドロが鋭く14三振を奪われ、ヒットは4本。全員があがりっぱなしで、夢のような時間が過ぎ、気がついたら0－2で負けていた。終って球場を出た途端、ふいに悔しさがこみ上げてきて涙が出たと幾人かが語っている。しかし「全国中等野球特輯号」の戦評は、沼津中学の逸機二回、村田投手の3安打に封じた好投や、その戦前の予想をくつがえした善戦が大いにたたえられている。

その翌日だったか優勝した浪商の平古場投手が、三振の山を築く試合を観て驚嘆した。中学五年生が、通常数えで十八歳の頃、木村、平古場たちは二十歳、沼中三年生の中山、村田などは十六歳だったのだ。

そして一日、OBの小原務（昭和二十年　中41回卒）に連れられ気晴しに外出した。焼野ヶ原の大阪だが行ってみようと電車に乗った。何気なく降りた所が尼崎。駅の近くの映画館で題名も思い出せない邦画を、全員でぼんやりと

観た。むやみと暑い日だったことだけは覚えている。

この大会出場では、多くの人たちに大変世話になったが、特に横田三郎（昭和十二年、中33回卒）は、食事や、汁粉、風呂の用意までしてくれ、行き届いた援助に頭が下がった。

帰校後の八月下旬、松本市主催近県中等学校招待野球大会に参加、松本商業に破れ全てが終った。

二学期が始まり、新チームがスタートした。主将は三塁杉本喜雄、外野に露木義孝、池田清、捕手長倉喜四郎、一塁渡辺功と、四年生のポジションが決まった。

そんな時、杉本、露木たちから、マネージャーをやってくれないかと、私に要請があった。長田忠昭に次いで、私は二代目のマネージャーを引き受けた。

昭和二十一年九月半ばのことである。

新チームは、十月富士中を15－1で破った初戦から、翌年二月、桐生市で行われた春の毎日新聞社主催関東選抜選考大会に出場、初戦鹿沼農工に勝ったものの桐生工に惨敗した。そして三月、五年生は卒業した。

時川清は旧制静高から東大。杉山(森)通三と平出善一は、ハマの早慶戦とうたわれた横浜高工、横浜高商（共に現横浜国大）に進んだ。時川は大学では野球と縁を切り、杉山・平出は野球部へ。時川、杉山、鷲巣はすでに亡い。この時の一・二番、時川、中山は正に三島市役所の広場で産れた野球少年であった。監督中山敏朗もまたその先輩だ。

昭和二十二年四月、私たちは中学最後の五年生。夏の大会に至るまでチームは十五勝四敗一分の成績を残した。

四敗は桐生工、成田中、実業団の大昭和製紙、永田製作所、引分けは県スポーツ祭での浜一中。

現在たまにしか使用されていない駅北の市民球場は、沼中の運動場の跡だ。全校生徒が職員と共に、防空壕や畑を鍬やスコップでならし、モッコをかついで平らにした。

そこへ大昭和が木造のバックネットを寄贈してくれ、昭和二十二年四月、成田中を招き球場開きを催した。共に前年全国大会に出場していたし、大昭和野球部に成田中の先輩がいたからだ。8－2で惨敗。大昭和16－5は仕方なかったが、永田製作所とは延長戦で4－2で破れたものゝ、県下で名の通った大人の選手たちの心胆を寒からしめたのは事実だ。県内では無敗。慶応商工、横浜商、横浜商工、千葉中など好試合を展開、快勝した。

全国大会への連続出場を目指し、迎えた夏の県大会。優勝候補の最右翼として、浜二中、浜商を破り、三回戦に当った富士中戦後、静岡に泊り続ける予定で、焼け跡に開業したばかりの旅館へ、意気込んでのりこんだ。

当日の第四試合、それまで練習試合で二回、歯牙にもかけなかった富士中に、×－1で破れたのだ。もう暮れかかった草薙のベンチに、へたりこんで立てなかったあの時の情景が、サイレント映画の一コマのように、ジーンと浮んでくる。夢破れ、虚脱したまゝ、戻った旅館で、眠れない切ない一夜をすごした。翌日、すぐには沼津へ帰れず、案じて旅館に来てくれた先輩江崎惇（中29回卒）に連れられ、映画館をハシゴし、夜、すごすごと沼津へ帰った。

「巨星沼中　遂に墜つ」―ある新聞の見出しは、今も忘れない。

この年、山静大会で静岡勢は敗退し、山梨谷村工の甲子園進出を許した。前年優勝チームとして、優勝旗の返還に杉本、露木は泊りがけで甲府球場へ行った。身延線がいやに長く感じられ、辿りついた甲府の暑さがたまらなかった。

〔昭和22年度沼中メンバー〕

（中）露木義孝　（補）服部真臣
（二）芹沢利久　（〃）長沢貴信
（遊）中山寛　（〃）山本明広
（三）杉本喜雄　（〃）高島豊一
（右）山川修司　（〃）中川和郎
（一）渡辺功
（捕）長倉喜四郎　監督中山敏朗
（投）村田弘
（左）池田清

打順は多少代ったが、メンバーは固定していた。県内外で注目され、実際負けは少なかったが、強いと思われ、強いから勝つとは限らない、勝負は勝った者が強いのだということを思い知らされたチームだった。

全国大会連続出場を阻まれた要因は、思えば幾つかあったにちがいない。周囲の雰囲気に乗せられ、勝って当然と思い込んでいた慢心、油断、しっくりいかなかったチームワークの微妙なズレ、勝負に対する執着心の弛緩、幼心に

意識した運、不運など―。しかし私はマネージャーとしてその中に居て、その濃密な想い出からこのチームこそが、ベストとまでは言わないが、沼中が産んだベターチームではなかったかと思っている。そしてそれが、まぎれもなく沼津中学最後のチームだったのだ。

昭和二十三年（一九四八・香陵44期）露木義孝は青山学院へ。全国大会出場者として注目され、後主将をつとめる。中山寛は四年修了で立教大学、杉本喜雄は早稲田。六大学のユニホームを戦後初めて身に着けたのはこの二人。しかし杉本は体調を崩し退部。

昭和二十四年、学制改革で新制高校三年に進級、卒業した長倉喜四郎は大昭和製紙。渡辺功は東京教育大。この卒業時、校名は沼津第一高等学校。そして二年振りに県大会に優勝、しかし山静大会で県大会で勝った静岡第一高校（現静岡高）に敗れ、二度目の全国大会甲子園への道は、はかなく消えてしまった。

昭和二十二年度沼中最後のメンバーでも、中山寛、村田弘、服部真臣、山本明広、高島豊一はすでに物故。佗しさが胸をつく。

昭和二十四年四月、沼津東高校となり、山川修司は翌二十五年、読売巨人軍からの勧誘をけり、慶応に進学。芹沢利久は立教。中山と共に砂押監督に鍊えられる。山川は一年の秋から外野手としてレギュラーに抜擢されながら、病に襲われ選手生活を断念、卒業後大昭和に入社、一時期、沼東野球部の監督としてかなりの好成績を残す。そのしばらく後、同様立教から大昭和に入った芹沢利久も、沼東監督をつとめ立教大学監督に就任する。山川は野球との縁は切れず高校、社会人野球の審判員として名を馳せる。

杉本喜雄も大昭和に入社、野球部マネージャーをつとめ沼東野球部ＯＢ会長などで、母校野球部の充実に貢献した。渡辺功は高校でソフトボールの監督として活躍、その間ソフトボールについて一書を著し、静岡大学教授となる。

何れにせよ、こうしたメンバーたちによって、六大学などへの進学が開けて行ったことは忘れてはならない。

村田弘のアダナは「パーチ」。由来は知らない。昭和二十五年卒業と同時に、阪神タイガースに入団。その時、三島の私の家まで暇乞いに来てくれた。学生服のまゝだったあの明るい笑顔を思い出す。入団契約金が三万円だと耳

にした。私が進学した早稲田の入学金が一万円ほどの頃だ。入団して間もなく肩をこわし、一年ちょっとで退団、大昭和に入社したが、野球生命は終っていた。

しかし思い返すまでもなく、昭和二十一年の夏の大会以来中学三年で主戦投手の杉山通三に代って、黙々として投げ続けた村田は、独り、沼中、沼一高、沼東のプレートに、立ちっぱなしの男だった。彼なくしてその栄光はなかったろう。その肩の酷使が、結局、折角初めてプロ野球選手としての道に進みながら、少時にして挫折せざるをえなかったのだ。

大昭和での勤務時代も、うつうつたる日々を重ね、四十五歳の誕生日直後、淋しく逝ってしまった。日焼けした顔とギョロリとした眼、憎めない彼の性格などを思い起こすと、何故か私は胸が熱くなる。そして二・三度受けた彼のストレートの、ズシンときた重い掌の痛みを、ふと思い出す。

こうして沼津中学野球部の歴史は、一応その頁を閉じ、沼津東高校野球部へと移っていく。私もまた、二年余にわたったマネージャー生活を、室伏稔（高2回、東大卒、元伊藤忠商事社長）に託し部活を終えた。

そしてこゝに、明治大正昭和平成と、百年余にわたる部史の内、沼中野球部と名乗った四十数年を、私は気ままにつづってみた。

平成十九年、高校野球界は特待生問題などで揺れ動いた。そんな中で、春、常葉菊川校が選抜で優勝。夏の県大会は出場校百校を超え、全国では四千数百校を数えるに至っている。今昔の感にたえない。

それにしても、沼津東校野球部の甲子園への道は、何時拓けるのだろうか、後輩諸君の健闘を心から祈っている。

昭和は数えて八十余年、思えば確かに遠くなった。

参考文献

『沼中東校八十年史』　上下巻
『沼津中学沼津東高百年史』　上下巻
『静岡野球人国記』　上下巻　読売新聞社静岡支局
『月刊　狩野川』　（川上五郎翁夜話）
『全国中等優勝野球特輯』　朝日新聞社
『高歌わずや栄の歌』　沼中沼東野球部
創部百周年記念誌

※ユニホームのマークNは山静大会まで。西宮はNumachuの筆記体であった。

・文中、先輩諸氏の敬称は略させて頂いた。そして当然加筆すべき方々を、多数省略した点深くお詫びいたします。

・「静岡野球人国記」発行者伊東貞良（香陵44期・私と同期）長期連載記事の主筆山根輝夫両氏には大変お世話になったことを付記し、心からお礼申しあげます。